

異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー

—文化的アイデンティティ研究を中心に—

教育心理学コース 大西晶子

Psychological studies on Cross-cultural contact

—Focusing on cultural identity—

Akiko ONISHI

The aim of this paper is to review literature related to psychological effect of cross-cultural contact. Over the past few decades, numerous attempts have been made to examine adjustment and adaptation of the person in cross-cultural setting. The development of the models and theories is at first reviewed and methodological issue is critically discussed that studies have been done within the framework of hypothesis testing. Secondly, culture identity is especially focused on because of its increasing significance for human being, living in ever complex cultural environment. Cultural identity has been studied mainly from two aspects: acculturation and developmental perspective. Finally, necessity of more integrated and corroborative works is suggested for the studies of cultural identity.

目次

- 1 はじめに
- 2 異文化間接触研究の全体像
- 3 国内の異文化間接触研究
- 4 文化的アイデンティティ研究
 - A 文化的アイデンティティの定義
 - B 集団間のダイナミクスへの焦点
 - C 形成プロセスへの注目
- 5 結語
- 引用文献

1 はじめに

文化人類学者の関心領域であった文化同士の接触の現象に、心理学的関心が向けられるようになったのは、1960年前後からと言われる。その背景には、第二次世界大戦後、米国の影響力が世界的に拡大し、在米留学生や海外駐在の米国人が増加、異なる文化環境における人間の心理的反応や適応状態への関心が深まったことがある(箕浦, 1987)。日本では、1970年代後半以降の企業の海外進出や、来日する留学生の増加が、その契機となった。さらに、近年のグローバル化の進展は、異文化間接触をより日常的なものにしており、

特に1980年代以降は出身国・民族・文化、さらには滞在目的・期間なども多様な人々の来日が増加、また海外渡航する日本人数も増加している。こうした社会変化は、異文化間接触の質にも変容を及ぼしている可能性がある。異文化間接触の心理学的研究の必要性が増すと共に、既存の研究枠組の再検討を試みる事が求められているといえよう。

従って、本論では、異文化間接触の影響について、心理学及びその近接領域がどのように捉えてきたのかを概観し、さらに変化する現代社会における研究の方向性について展望することを試みる。特に後半では、文化的アイデンティティ研究に絞って、議論を行う。

2 異文化間接触研究の全体像

ある程度の文化化(enculturation)を経た個人が、他の文化集団やその成員と持つ相互作用は異文化接触(culture contact, cultural contact, intercultural contact)(渡辺, 1995)、或いは、異文化間接触(Cross-cultural contact)(Bochner, 1982)と呼ばれる。心理学の関心は、接触による社会・文化構造上の変化に対する個々人の反応を、文化的適応(cultural adjustment)、文化的順応(cultural adaptation)などの概念で捉え、個人と環境との間の適合を検討することにあつた。

異文化間接触の結果としては、受入れ文化への肯定的客観的態度の形成、自文化の見直し、広い世界観の獲得、ステレオタイプや自文化中心主義の低減、自己知覚の拡大、など、ポジティブな効果が知られる(Adler, 1975; 加藤・加藤, 1984; 斎藤, 1986; 星野, 1990)が、研究の焦点は、カルチャーショック(Oberg, 1960)の概念に代表される、異文化間接触に伴う不適応の予測に置かれてきた。特に異文化間心理学では、仮説検証的なアプローチを用いて、異文化間接触の過程で生じる心理的狀態を、適応—不適応の次元に布置し、その予測要因の検討を積み重ねてきた。年齢・性別・言語・滞在の永続性・家族構成・接触の目的・教育水準等のデモグラフィック要因、認知傾向・性格特性等心理学的な特性、或いはホスト文化と自文化の関係(相手文化に対する態度やイメージ、受容の程度)等、様々な予測変数が検討されてきた。一方、従属変数である「適応(不適応)」状態は、個々の研究者の操作的定義に基づき、標準化された精神的健康の尺度(抑鬱など)や自作の尺度(満足感や生活ストレスの量)を用いて測定される。共通した「適応」概念の欠如が、結果の比較や研究の理論的發展を阻害する一要因となっている、との指摘もなされる。

適応状態の時間的経過の検討は、研究関心の一つでもあり、「滞在期間」は殆どの研究で欠くことのできない変数とされている。「接触開始直後の良好な状態—その後の不適応期—回復期」という共通性を持ついくつかのモデルが示され、中でも適応のUカーブ説(Lygaard, 1956)、位相モデル(Adler, 1975)が有名である。しかしながら、その後行われた研究では、結果が支持されないことが少なくなく、また変化の生じる時期やメカニズムについても、一定した見解は示されていない。個人内の時間的変化である適応プロセスを、横断的研究の結果をもとに論じているという、方法論上の問題点なども指摘されている(Church, 1982)。またこれらの初期の研究が、ピースコープや宣教師、ビジネスマン等の、比較的短期間の異文化間接触の、さらに接触開始後数ヶ月から数年の経験を扱っていたのに対して、その後の研究ではより多様な属性の集団へと研究対象が広がったことも、一様な変化プロセスを辿ることを示したモデルの限界の背景にはあるだろう。研究が進むにつれ、研究関心やアプローチの仕方も、対象となる集団の異文化間接触の特徴を反映して多様化し、適応プロセスを、複数の質の違うレベルや次元から構成されるものとして捉える統合的な見方が主流となっている。例えば、Berry(1997)は、異文化間接触を①新た

な文化において必要なスキルの学習が必要な段階、②自文化とのネゴシエーションが文化的葛藤を生じさせ、文化学習が困難になってストレス(文化変容ストレス)が生じる段階、③ストレスが個人の対処能力を越え、結果的に抑鬱や不安が高まり、心理的障害が生まれる段階の3つに分けて捉えている。初期の段階は、異文化における個人の適応を、「新たな文化の学習過程」(Furnham & Bochner, 1986)と捉える社会学習理論の立場を取り入れており、さらにはその文化学習が困難であると個人が評価した場合に、不適応的な状態が生じると捉える、ストレス対処理論(Lazarus & Folkman, 1984)を背景に持つ。ストレスの量やストレス対処を可能とする個人の資質・適切な援助の有無などの異なりによって、異文化間接触状況にあっても不適応を経験しない人もおり、個人差を説明するのに有用なモデルである。また、社会学習理論的な異文化適応の捉え方は、不適応の予測を主な関心としていた異文化間接触研究に、文化学習の場となるソーシャルサポートの機能の検討や、異文化間コンピテンスを身につけるための異文化トレーニングの研究など、適応促進を目的とした、実践的な側面を備えた研究の方向性をもたらした。特に、留学生や駐在員等の、限定的な滞在目的をもち、集団内での学習課題に普遍性の高い集団に対して、こうしたアプローチが用いられることが多い。また、適応を心理的適応(心理的な幸福感・満足感・安定した文化的アイデンティティ等)と社会的適応(適切な社会文化的スキルの利用)の二つの次元に分けて捉え、それぞれを予測する要因や、両者の関係についても検討されている(Searle & Ward, 1990)。

精神科医の秋山(1992; 1998)も同様に、滞在初期を、普遍性が高く、外部環境の変化への認知的適合が課題となる時期であり、異文化スキルの学習によって対処が可能な段階と捉えている。滞在初期、或いは限定的な滞在目的を持つ場合には、異文化で必要とされるスキルが明確であり、心理的な適応は、そのスキルの獲得と深く結びついたものになると考えられる。

次に、滞在が長期に渡る場合、或いは滞在の目的が限定的ではなく、「生活者」として新たな社会に参加していく場合には、異なった視点が必要とされる。前述の秋山(1992; 1998)は、滞在が長期化した場合には、文化的アイデンティティの変化など個人の内的な問題が生じ、カウンセリングなどによる援助が必要となると指摘している。生活者として滞在する人を対象とした研究には、言語や社会スキルの獲得の促進や、文化変容ストレスの緩和作用(木下, 1997)等、ソーシャル

ネットワークや、ソーシャルサポートの観点から生活全体の様子を捉えたり、文化的アイデンティティ維持や変容を検討するものが多く見られる。さらに、社会化の途上で異文化間接触を経験する児童・青年の場合、比較的短期間の接触によっても、発達の側面に強く影響が生じることが知られている。

滞在期間や目的、発達段階等、研究対象者の属性に応じて、概念やモデルの精緻化、研究関心の多様化が進んでいる。従って、以下では、まず国内の研究を中心に、異なる異文化間接触集団ごとに、研究の目的やアプローチについて論じる。

3 国内の異文化間接触研究

国内で行われる研究は、主に、在日外国人、海外在留日本人、海外滞在経験を持つ帰国者を対象に進められてきた。滞在期間と目的によって分類すると、表1に示すようになる。

この中で、最も研究の蓄積が多いのは、限定的な滞在目的を持った一時滞在者(sojourner)の研究であり、中でも留学生を対象としたものが、1980年代半ば以降

表1 滞在目的・期間による異文化間接触集団の分類

期間 目的	一時的	長期的・永続的
限定的	留学生 駐在員 「出稼ぎ」外国人労働者	(外国人労働者の一部)
生活者	駐在員・留学生の同伴家族 (配偶者・帰国子女)	(外国人労働者の一部) 難民<インドシナ難民> 中国帰国者 少数民族・文化集団 <在日コリアン・アイヌ等> 国際結婚による滞在者

に増えている。留学生の研究は、生活ストレスや適応の実態を全般的に描き出すことを目的とした研究(モイヤー, 1987; 徐・蔭山, 1994)、滞在国に対して持つ態度やイメージを扱った研究(荻原・岩男, 1988)、自文化や日本文化に対する態度と適応の関連(井上・伊藤, 1995, 1997; 井上, 1997)や、態度形成にエスニシティが与える影響を検討した研究(山崎, 1993; 山崎・平・中村・横山, 1997; 山崎・倉元・中村・横山, 2000)など、様々な角度から進められている。さらに近年では、単に適応/不適応の議論に留まらず、ソーシャルサポートやソーシャルスキル、友人関係などの観点に絞った研究(高井, 1994; 周, 1994, 1995a, 1995b; 田中,

1991; 田中・藤原, 1992; 田中・高井・神山・藤原, 1993)や、適応の促進を念頭においた実践的研究(水野・石隈, 1998, 2000; 加賀美・箕口, 1997)も増えており、海外の一時滞在者の研究の発展と、同様の傾向を示している(Church, 1982; 高井, 1989)。特に、留学生研究は、大学等の教育機関において、援助専門家によって行われるものが少なくなく、制度面での改革やより良い留學生生活の促進が、調査を行う研究者側の研究の動機づけや目的の一つとなっており、研究結果を現行の留學生援助システムに応用させることが可能となっている。一部に、アジア系と非アジア系の留學生の比較などが行われ、両者の対日経験の違い等が明らかにされているが(荻原・岩男, 1988)、全体的には、在日留學生の構成を反映して、中国出身者を中心としたアジア系の留學生を対象とした研究が主であり、得られた結果がどの程度留學生集団全体の経験に一般化が可能であるかは、検討が必要である。また、特に学部留學生の場合、異文化での適応課題と、発達課題とが重なりあっている為、発達援助的な関わり必要性も指摘されている(井上, 1997)。

留學生と同様に、限定的な滞在目的を持つ一時滞在者として、海外駐在員が挙げられる。現地でのコミュニケーションの問題の検討など、異文化間コミュニケーションの分野での研究が盛んであり、さらに異文化で仕事の遂行に必要な文化的スキルのトレーニングの開発など、実践的な研究も行われている。一方、駐在員の同伴家族は、限定的な滞在目的を持たず、生活者として異文化間接触を経験することになる。配偶者を対象とした研究は少ないが、滞在先の文化に対する態度と適応との関連を検討した研究(Shibuya, 2000)や、滞在期間中に生じる価値観の変化と帰国後の適応問題の関連について検討した研究(伊佐, 2000)等が見られる。海外に居住する親に伴って海外生活を送り、その後日本に帰国した児童・生徒は、いわゆる「帰国子女」と呼ばれるが、留學生と並んで日本では早くから心理学的な研究が行われてきた。自我形成の途上期を海外で送ることと関連して、主に「アイデンティティ」の側面を重視した研究が目立つ。文化的アイデンティティに焦点を当てたものが中心で、滞在中、帰国後を含めた時間的経過の中での変化を追った研究も見られるが(箕浦, 1984; 南, 2000)、多くは日本帰国後に、どのように滞在先の文化と日本文化との折り合いをつけるかが議論されている(松原・伊藤, 1982; 小島, 1988; 斎藤, 1988; 西, 1993; 小沢, 1995)。

その他、生活者として長期的な異文化間接触経験を

持つ集団として、在日コリアン(中村・慎・平・川本他, 1994)や、日系ラテンアメリカ人(辻, 1999; Tsuda, 1999; 延島, 1984)を対象とした研究が見られるが、同様に「アイデンティティ」の側面が中心的な関心領域となっている。特に在日コリアンの場合、社会的、歴史的、制度的な背景と個人の歴史が深く結びついており、社会学的なアプローチによる研究が多い領域である(福岡, 1993; 片倉, 1996)。さらに、近年の国際結婚の増加を反映し、日本人を配偶者に持つ外国人やその子ども(国際児)に焦点をあてた研究が、社会学、家族社会学の分野を中心に見られる(嘉本, 1998; 竹下, 2000; 施, 2000; 中澤, 1996)。その他に、日本人を夫に持つフィリピン人妻のストレスについての精神科医桑山(1995)の研究や、バリ在住の日本人—インドネシア人国際結婚家族の国際児の文化的アイデンティティを文化人類学的な手法で、縦断的に研究した鈴木・藤原(1992・1993)等も見られる。

表1の枠組での分類が困難な集団として、いわゆる「外国人労働者」が挙げられる。1980年代半ば以降に急増した外国人労働者や就学生の中には、「出稼ぎによる本国への仕送り」という限定的な滞在目的を持ち、一定の期間滞在した後は帰国する人達がいる一方で、滞日中に滞在目的が変化し、現在では長期的な日本での生活を選択する者も見られる。こうしたSojournerから定住者への変化は、日系アメリカ人や日系ラテンアメリカ人、トルコ系ドイツ人などを含め、世界中の移民に見られる現象である。しかしながら、国内では、法的位置づけが他の外国人労働者とは異なる日系人労働者を対象とした研究以外は、井上(1999)、大西(2001)など若干の探索的研究が見られるのみで、外国人労働者の異文化間適応について論じた研究は少ない。精神科領域からの不適応事例の報告(杉山・岩波・荻野・江端他, 1992)や、社会学的実態調査(駒井, 1995)に留まっている。

グローバル化の波の中では、留学や駐在等、目的達成のための期限付きの異文化間接触を経験する人に加えて、人生を送る場として異国を選択する人、異文化間接触状況を日常として生きる人もまた、増加している。日本国内でも、1980年代に急増した来日者の滞在が長期化しており、アイデンティティの問題への取り組みが重要性を増していくことが予想される。

従って、以下では、主にアイデンティティの領域にしばって、異文化間接触の心理的影響について捉える。

4 文化的アイデンティティ研究

A 文化的アイデンティティの定義

ある文化の中で生活する個人が、自己をその集団の中に位置づける機能については、社会学、社会心理学、文化人類学、発達心理学等、様々な領域において研究が進められてきた(Phinney, 1990)。一般的に、社会心理学の分野では、民族的／文化的アイデンティティを、個人のもつ社会的アイデンティティの一部として捉え(Tajefe, 1978; Tajefel & Turner, 1979)、他集団との関係の中での個人の「自己定義」と、特にその個人が主観的に持つ「所属感」の二側面を持つものとして定義する。他者との関連で自己を提示する過程で、民族的出自で自己を定義し、他者と区別する「民族アイデンティティ」、特定の文化集団を用いる「文化的アイデンティティ」(箕浦, 1995)、さらには「国民アイデンティティ」や「エスニシティ」「人種 racial アイデンティティ」といった概念が用いられることもある。概念間の明確な使い分けを主張する立場がある一方で(Helms, 1996)、現状として、互換可能な言葉として使用される場合が多く、また研究の行われる文脈に、言葉の定義や含意、使い分けが依存している。さらに、集団をどのようにカテゴライズするかも、その社会における多数派との関係に影響を受け、「アフリカ系アメリカ人」「アジア系アメリカ人」「ヒスパニック系アメリカ人」等の人種・民族集団による分類や、「イスラム教徒」「ヒンズー教徒」等の宗教的側面による分類など、様々に分類される。さらに、辻本(1998)は、在日日系人労働者の文化的アイデンティティを検討し、来日前に本国のポリビア人との対比で抱いていた「日本人アイデンティティ」が、滞日中には「日本で生まれ育った日本人」との対比が生じることによって「日系人アイデンティティ」「ポリビア人アイデンティティ」と変化することを見出した。所属感を感じたり、自己定義を行う枠組は、比較となる他集団との関係などの文脈に依存しており、静的な実態ではないといえる。国家や民族は、社会的な産物であり(Anderson, 1991)、人々はそこに何らかの「文化的な共通性」を想定し、さらにそれを手がかりに、自己の所属する集団の枠組を同定し、自己概念の参照枠組として用いると考えられる。

従って、本論では、民族的アイデンティティ、文化的アイデンティティ、国民アイデンティティ、などを、個人がある文化的集団の一員として形成する自己概念、所属感ととらえ、これらすべてを総括するものとして、「文化的アイデンティティ」と定義する。

異文化間接触研究においては、文化的アイデンティティは、その形態と発達のプロセスの二点について検討がなされてきた。以下、それぞれについて述べる。

B 集団間のダイナミクスへの焦点

文化的に同質性の高い成員からのみ構成された社会においては、文化の側面が自己を捉える枠組として意識上に登ることは少ない。一方、日常的に異文化が混在する社会では、個人のアイデンティティの源として、文化的集団が重要な役割を果たす。従って、多文化社会における文化的少数派が、多数派との関わりの中で形成する文化的アイデンティティの様相が、これまで中心的に形成されてきた。

自文化集団に対する態度、所属感、文化実践への関わりなど、文化的アイデンティティの構成要素や構造 (Hutnik, 1991; Breakwell, 1986; 1992) が明らかにされ、さらにその要素を測定する測度を作成して個人の文化的アイデンティティの特徴を捉え (Helms, 1996)、自尊心や自己概念との関連を検討する (Atkinson, Morten, & Sue, 1993) 試みがなされてきた。

文化間移動に伴い異文化間接触が開始される場合、集団間のダイナミクスの中での自己の位置づけは、しばしば文化変容理論 (Acculturation theory) の枠組によって検討される。文化変容は、本来は異なる文化同士の接触によって生じる社会の変容に注目する概念であったが (Redfield, Linton & Herskovits, 1936; Sigel, Leonad & Evon, et.al. 1952)、Berry (1997) は、文化接触を経験する集団内の個々人に焦点をあて、個人の文化的態度、価値、行為における変化を「心理的文化変容」と呼び (本稿では、文化変容をこの意味で用いる)、さらにその際に経験される困難を「文化変容ストレス」として捉えている。自文化か、相手文化どちらか一方との関係を捉える一次元的なモデル (Assimilation model) に対して、Berryらの示すモデルは双方の文化との関係を問う二次元モデル (Integration model) であり、その他多くの研究でも、二次元モデルが用いられている (Berry, 1980, 1990, 1997; Berry & Sam, 1996)。さらに、個人が双方の文化とどのような関係を築くか (どちらとの関係を重視し、維持しようとするか) という「主体的な選択」を「文化変容戦略」、或いは、「文化変容態度」として捉え、類型化が行われる。理論的には、双方との関係を重視する「統合」、自文化のみを重視する「孤立」、相手文化のみを重視する「同化」、どちらも関係が弱い「周辺化」の4類型が想定され、「統合」の

戦略 (或いは態度) が最も心理的に適応的 (高い自尊感情・低い抑鬱等) な状態と関連するとされる (Berry & Kim, 1988)。帰国子女の、滞在先と日本との間の文化葛藤の解決に用いられる適応戦略 (巽岩, 1987; 小島, 1988) や、在日日系ブラジル人の自己定義 (延島, 1994)、在日コリアンのアイデンティティ (福岡, 1993; 中村・慎・平・川本他, 1994) など、用いられる用語は若干異なるが、基本的には統合を最も安定的なタイプと捉える、二次元モデルが用いられている。1970年代以降の多文化主義の高まりとともに、文化の「統合」がマクロレベルで提唱されるようになったことも (水上, 1996)、「統合」を理想とする二次元モデルの利用の広まりの背景にはあると考えられ、日本社会の特質や社会変化を考慮することなく、無批判に理論を応用することには、慎重である必要があるだろう。

文脈の違いについては、社会的学習理論の立場では、従来から「文化差」の問題として捉えてきた経緯がある。文化の類似度を「文化的距離」として捉え、距離が広い程 (類似していない程) 必要なスキルの学習の量や困難さが異なると指摘している (Furnham & Bochner, 1982; Redmond, 2000)。さらに近年では、単に違いの「程度」の問題ではなく、滞在者の性格特性や個人に取り込まれている出身国の文化的規範と、滞在国での規範のマッチ (culture fit) の重要性が示されている (Searle & Ward, 1990; Ward & Kennedy, 1993)。例えば、「外向性」と適応との関連が、ニュージーランドに住むマレーシア・シンガポール人の学生では、プラスの関連を示した (Searle & Ward, 1990) のに対し、シンガポールに住む英語圏欧米人では、抑鬱との関連を示す (Armes & Ward, 1989) など、culture fit の概念を用いなければ説明できないような、相反する結果が得られている。このように、近年の文化変容研究は、文化差の要因を組み込んだ検討を行っている。

理論的には、文化変容は文化接触を経験する両者共に経験されるものであるとされるが、受入側の要因や、両者の相互作用についての検討は十分にはなされていない。従って、文化変容戦略や態度の決定プロセスについての研究は少なく、わずかにホスト社会の受容的な態度や、文化集団間の良好な関係が、「統合」を導く文脈要因として指摘されているに留まっている (Nesdale & Mak, 2000; Piontkowski, Florack, Hoelker & Obdrzalek, 2000)。

文化変容の議論は、集団間のダイナミクスの中で、自己の文化的アイデンティティの保持、変化への個々人の取り組みや、その際経験されるストレスを捉

えるのに適しており、特に二次元モデルは、現象を捉え説明するのに明快な枠組であるため、多くの研究で用いられている。近年は、ホスト社会の要因、さらにはホストと出身国の間の文化的な差異等、文脈変数を組み入れた研究が行われ、モデルの精緻化が試みられている段階である。しかし、状況の要請への対処というストレス対処パラダイムは、ホスト社会・自文化との関係が個人に選択され、その後文化的アイデンティティとして内在化されていくプロセスという、より持続的な変化に関しては、明らかに出来ないという限界を持つ。

C 形成プロセスへの注目

文化的な特徴が、個人に取り込まれていく、文化的アイデンティティ形成(変容)の側面が、異文化間接触下のアイデンティティ研究のもう一つの関心領域である。

多文化社会における移民・少数民族等は、誕生とともに、多数派文化と自文化との接触が開始され、その中で文化的アイデンティティを発達させていく。米国においては、民族集団ごとに、アイデンティティ発達が検討されていたが、その共通性を捉え、少数派集団に共通の文化的アイデンティティ発達モデルが生まれてきた(Atkinson, Morten, & Sue, 1983; Phinney, 1989, 1990)。中でも、Phinney(1989, 1990)の示したモデルは、広く受け入れられている。それによると、文化的アイデンティティにはすべての集団に共通の要素(自己定義・帰属感・所属集団に対するプライド)と、集団独自の要素(他集団との差異化を可能とする、独自の文化実践・習慣・態度)があり、共通の要素については、民族を超えて普遍的な発達プロセスが想定可能であるとされる。さらに、文化的アイデンティティ発達は、自我アイデンティティ発達(Marcia, 1966, 1980)と類似のプロセスを示し、文化的アイデンティティに気づきのない状態(多数派文化にポジティブ)→何らかのきっかけによって気づきが生じ、アイデンティティの問い直しが始まる→自文化へのコミットメントが強まる(多数派文化に否定的)という経過を経て洞察が深り、最終的には自文化に対するアイデンティティが内在化・達成(多数派文化に対する否定的な感情消滅)される。差別や文化的差異といった集団間関係は、個人に自文化への気づきを生じさせ、アイデンティティの問い直しをもたらすきっかけとして作用することが想定されている。

Phinney(1990, 1992)の研究関心の一つは、普遍的な

プロセスを測定する測度の開発であり、一つの集大成として、Multigroup Ethnic Identity Measure(MEIM)(Phinney, 1992)が示されている。MEIMを用いて、文化的アイデンティティの状態を測定し、自尊心や精神的健康との関連が検討されている。文化的アイデンティティは、達成状態に至らずに、拡散・早期完了・モラトリアムの状態に留まることもあり、そうした場合、達成の場合と比較すると、未成熟な自我発達、低い自尊心を示す(Phinney, Cantu & Kutz, 1997)。ただし、この自我発達と文化的アイデンティティの関連については、かならずしも一貫した結果を示しておらず、例えば、CrossとSmith(1996)は、米国の黒人青年について、少数派としてのアイデンティティは未発達であっても、高い自尊心を示す者がいることを挙げ、すべての人にとって「黒人であること」が同等の意味を持つのではなく、宗教や性別、職業的アイデンティティなどが自己概念の中で中心的な位置を占め、個人の自尊心の軸になる場合もあると指摘している。仮説の不支持は、Phinney(1990)が主張するように、妥当性・信頼性を兼ね備えた測度の開発によって克服可能な問題であるのか、それとも、そもそもの仮説が、再検討される必要があるのか、今後の研究課題であるが、後者の場合、仮説検証的な研究モデルを用いる限り、明らかにすることが出来ない。

Phinneyの少数派アイデンティティ発達モデルは、文化間移動を伴って、途中から少数派となる集団の経験を捉える際にも用いられる(小野田, 1988; 辻, 1998)。この場合、発達段階のどの時点で、どの程度の期間、異文化間接触を経験するか、という要因の考慮が必要となるだろう。青年期以前のアイデンティティの発達途上の段階と、一旦、ある文化の中で文化化が進んだ後とでは、変化プロセスも、その結果も異なったものとなる可能性がある。青年期以降に始まる異文化間接触の場合、特に、複雑な文化環境の中でのアイデンティティの「ネゴシエーションや維持の仕方」(Deaux, 2000)が重要性を増すだろう。ネゴシエーションのプロセスは、相互作用的であり、また個人的なものである。「達成」をゴールとした直線的なモデルの色合いが濃いPhinneyモデルが、果たして多様なネゴシエーションの過程を捉え切れるのかどうか、検討する必要がある。

さらに、Phinneyのモデルは、文化的アイデンティティの構造に関する議論が十分ではなく、あたかも文化的アイデンティティと、自我アイデンティティが独立し並行して存在するかのような印象が強い。Phinney

に限らず、異文化間接触においては、とかく「文化」の側面のみを取り出して、単独で論じるアプローチがとられがちである(原, 1995)。これによって、個人の発達全体の中での文化的な要因の影響は不明瞭となり、また研究の発展性が阻害される。

箕浦(1984)は、海外生活を「擬似実験デザイン」と見なし、同一文化内では明らかにされにくい文化の体得過程を浮かび上がらせた。このように、文化的アイデンティティの発達は、それが個人の発達全体の中でいかなる意味を持つのか、という視点が伴うことによって、対象となった人達の経験の「理解」以上の意味を持ち得る。

5 結語

異文化間接触によって生じる心理的な影響を、主要な研究関心の一つであり、さらに今後も重要性が増すと思われる、「文化的アイデンティティ」の側面からレビューを行った。

心理学における異文化間接触の扱いは、仮説検証的な研究が中心であり、適応の予測変数を検討することで進められてきた。国内においても同様で、日本国内の社会文化的文脈の特徴を検討することは少なく、多文化社会で発展してきたモデルを用いた研究が多い。研究全体の流れとしては、異文化間接触を学習場面と捉える社会学理論的な立場が、一時的に滞在目的を持って異文化間接触を経験する人達を対象に、実践的な側面を備えた研究アプローチとして定着している。また、文化変容理論や、文化的アイデンティティ発達のモデルなど、集団特性を越えて存在する共通の要素を抽出し、モデル化、理論化が進んだことによって、条件の異なる異文化間接触の心理的影響について、比較が可能となっている。しかしながら、こうした普遍性の探索が一定の研究成果を示す一方で、いくつかの問題点も挙げられる。今後議論が必要であろうと考えられるのは、次のような点である。

まず、文化的アイデンティティの二つのアプローチ間での交流が必ずしも活発ではなく、社会的な関係か、時間的な変化、のどちらか一方を論じる研究が多いことが上げられる。また、近年見られる文脈変数の考慮も、文脈を文化的変数として仮説検証型モデルに取り込み、影響の如何を論じるに留まっており、マクロ的文脈が、個人の心理的状态に影響を与え、個人に変化を及ぼす経路、つまり発達の観点が抜け落ちている。マクロ的な要因は、重要ではあるが、個人的に

経験されて始めて始めて意味を持つものであり、発達の視点の考慮は、臨床的な視点から見ると非常に大きい。

次に、社会文化的文脈は所与の、安定した現実であるという、仮説検証型モデルの大前提についても、問い直しが必要である。安定した文脈の中では、社会的に構築された「望ましい在り方」が、社会全体の合意のもとに受入れられ、一つの価値観を形作る。一方、急激な社会変動とそれに伴う社会の多様化は、「望ましい在り方」に多様化をもたらしている可能性がある。従って、接触するホスト文化、自文化の尊重という20世紀後半に「望まし」とされたアイデンティティの有り様についても、再考が必要であり、望ましい在り方をゴールにおいた、直線的な発達モデルや類型化についても、根本から見直す必要があるだろう。

また、異文化間接触の現象や、文化的アイデンティティについては、文化人類学・社会学や、よりマクロレベルでは、経済や政治学によっても検討されている。元来マクロ的、ミクロ的な現象である異文化間接触を論じるのに、複数の視点が存在するのは当然といえ、問いの立て方や焦点の当て方には違いがあるとしても、一つの現象を扱っているという認識と、分野を越えた生態学的な視点に基づく共同研究が必要であろう。例えば、前半で述べた外国人労働者の心理的側面の理解には、世界的な労働市場の動向や、経済状態の把握、さらには国内の入国管理法の特質等を知ることが欠かせない(梶田, 2001参照)。異文化間接触の現状は、流動的、可変的であり、ミクロ的であると同時に、マクロ的でもある。尺度の精緻化や、予測変数の検討に加えて、現象を捉える根本的な研究枠組、概念も含めた、より柔軟な検討が必要な時期をむかえているといえる。さらに、異文化間接触研究が蓄積された欧米諸国とは異なる社会文化的文脈である日本で行われる研究は、理論的發展に大きく寄与しうる可能性を持っている。

<引用文献>

- Adler, P.S. 1975 The transitional experience :An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*. 15, 4, 13-23
- 秋山剛 1992 異文化教育と自己への洞察について、現代のエスプリ, 299, 89-99
- 秋山剛 1998 異文化間メンタルヘルスの現在、こころの科学, 77, 14-22
- Anderson, B. 1991 Imagined community : 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行 (白石さや・白石隆訳), 1997, NTT出版株式会社

- Armes, K. & Ward, C. 1989 Cross-cultural transitions and sojourner adjustment in Singapore. *Journal of Social Psychology*, 129,273-275
- Atkinson, D. Morten, G., & Sue, D. 1993 *Counseling American Minorities*. London: Sage.
- Berry, J. W. 1980 Acculturation as varieties of adaptation. In A. Padilla (Ed.). *Acculturation: Theory, models and some new findings* (pp. 9-25). Boulder, CO: Westview.
- Berry, J. W., & Kim, U. 1988 Acculturation and mental health. In P. Dasen, J. W. Berry, & N. Sartorius (Eds.), *Health and cross-cultural psychology* (pp. 207-236). London: Sage.
- Berry, J. W. 1990 Psychology of acculturation: Understanding individuals moving between cultures. In R. W. Brislin (Ed.), *Applied cross-cultural psychology* (pp.232-253). London: Sage.
- Berry, J. W., & Sam, D. 1996 Acculturation and adaptation. In J.W. Berry, M. H. Segall, & C. Kagitcibasi (Eds.), *Handbook of Cross-Cultural Psychology*. Vol.3, Social Behavior and Applications. Boston:Allyn & Bacon.
- Berry, J. W. 1997 Immigration, Acculturation, and Adaptation. *Applied Psychology, An International Review*, 46,1,5-68.
- Bochner, S. 1982 The social psychology of cross-cultural relations In S. Bochner (Ed.), *Culture in contact*. Pergamon Press
- Breakwell, G. 1986 *Coping with Threatened Identities*. Methuen: London and New York.
- Breakwell, G. 1992 *Social Psychology of Identity and the Self Concept*
- Church, A.T. 1982 Sojourner Adjustment. *Psychological Bulletin*, 91,2,540-572
- Cross, W.E. & Smith, P. F. 1996 Nigrescence and Ego Identity Development: Accounting for Differential Black Identity Pattern. In P.B. Pdersen, J.G.Dragunus, W. J. Lonner, & J.E. Trimble (Eds.). *Counseling Across Cultures* 4th Ed. Sage.
- Deaux, K. 2000 Surveying the Landscape of Immigration: Social Psychological Perspectives. *Journal of Community and Applied Social Psychology*, 10,421-431.
- Furnham, A. & Bochner, S. 1986 *Culture Shock. Psychological reaction to unfamiliar environments*. Methuen : London and New York
- 福岡安則1993 在日韓国・朝鮮人—若い世代のアイデンティティ 中央公論社
- Helms, J. E. 1996 Toward a Methodology for Measuring and Assessing Racial as Distinguished from Ethnic Identity. In Sodowsky, G., & Impara, J. (Ed.). *Multicultural Assessment in Counseling And Clinical Psychology* (pp.143-192). University of Nebraska.
- 荻原滋・岩男寿美子1988 日本で学ぶ留学生：社会心理学的分析。勁草書房
- 原裕視 1995 異文化接触とアイデンティティ, 特集：異文化接触とアイデンティティ,異文化間教育, 9, 4-18
- 巖岩ナオミ 1987 「成長日本人」の適応における内部葛藤—ライフヒストリーによる研究から,異文化間教育,1,67-80.
- 星野命1990 青年期の異文化体験と成長—カルチュアショックを越えて 青年心理, 84,2-10
- Hutnik, N. 1991 *Ethnic Minority Identity: A Social Psychological Perspective*. New York.
- 伊佐雅子 2000 女性の帰国適応問題の研究—異文化受容と帰国適応問題の実証的研究, 多賀出版
- 井上孝代・伊藤武彦 1997 留学生の来日1年目の文化受容態度と精神的健康,心理学研究,68,4,298-304
- 井上孝代・伊藤武彦 1995 来日1年目の留学生の異文化適応と健康, 異文化間教育, 9,128-141
- 井上孝代 1997 留学生の発達援助—不適応の実態と対応, 多賀出版
- 井上晶子 1999 アジア系ムスリム就労者のストレス対処—バングラデシュ・パキスタン・イラン出身男性を対象に,東京大学教育学研究科紀要, 39,255-264
- 徐光興・蔭山英順 1994 在日中国人留学生の適応に関する実態と問題,名古屋大学教育学部紀要,41,39-47
- 加賀美常美代・箕口雅博 1997 留学生相談におけるコミュニティ心理学的アプローチの試み—チューター制度導入後の留学生寮相談室活動の質的变化,コミュニティ心理学研究,1,1,15-30.
- 嘉本伊都子 1996 国際結婚をめぐる諸問題—境界線上の家族, 家族社会学研究, 8,53-66
- 加藤厚・加藤隆勝 1984 帰国高校生におけるアイデンティティの特徴 筑波大学心理学研究,6,57-66
- 梶田孝道 1993 越境する文化,回帰する文化：世界, 12, 235-252.
- 梶田孝道 2001 国際化とアイデンティティ, ミネルヴァ書房
- 木下真理子1997 文化変容ストレスとソーシャルサポート—多文化社会カナダの日系女性たち, 東海大学出版会
- 駒井洋 1995 定住化する外国人, 明石書店
- 倉石一郎 1996 歴史のなかの《在日朝鮮人アイデンティティ》—ライフヒストリーからの一考察, ソシオロジ,40,1,51-67
- 桑山紀彦 1995 国際結婚とストレス—アジアからの花嫁と変容するニッポンの家族, 明石書店
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 *Stress, Appraisal, and Coping*. (本明寛・春木 豊・織田正美監訳1991ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究 実務教育出版)
- Lysgard, S. 1956 *Adjustment in a foreign society:Norwegian*
- Marcia, J. E. 1966 Development and Validation of Ego-Identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3,551-558.
- Marcia, J. E. 1980 Identity in Adolescence. In J. Andelson (Ed.) *Handbook of adolescent psychology* (pp.159-187). New York: John Wiley
- 松原達哉・伊藤咲子 1982 海外帰国子女の民族的帰属意識・集団同調性・個人志向性の研究 海外子女教育センター研究紀要, 1,5-24
- 南保輔 2000 海外帰国子女のアイデンティティ—生活経験と通文化的人間形成, 東信堂
- 箕浦康子1984 子どもの異文化体験 思索社
- 箕浦康子 1987 異文化接触研究の諸相, 文化と人間の会(編)異文化とのかかわり, 川島書店, 7-35
- 箕浦康子 1995 異文化接触下でのアイデンティティ, 特集：異文化接触とアイデンティティ, 異文化間教育, 9, 19-36
- 水上徹男 1996 異文化社会適応の理論—グローバルマイグレーション時代に向けて, ハーベスト社
- 水野治久・石隈利紀 1998 アジア系留学生の被援助志向性と適応に関する研究, カウンセリング研究, 31,1,1-9
- 水野治久・石隈利紀 2000 アジア系留学生の専門的ヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理的変数の関連, 教育心理学研究, 48,2,165-173

- モイヤー康子 1987 心理ストレスの要因と対処の仕方, 在日留学生の場合, 異文化間教育, 1, 81-97
- 中澤進之右 1996 農村におけるアジア系外国人妻の生活と居留意識—山形県最上地方の中国・台湾・韓国・フィリピン出身者を対象にして, 家族社会学研究, 8, 81-96.
- Nesdale, D. & Mak, A. 2000. Immigration Acculturation Attitudes and Host Country Identification, *Journal of Community and Applied Social Psychology*, 10, 483-495.
- 中村俊哉・慎栄根・平直樹・川本ひとみ・横山恭子・高田夏子 1994 在日朝鮮人学校の中学生の異文化接触体験, 教育心理学研究, 42, 291-297
- 西恵子 1993 アメリカ滞在が少年期のアイデンティティに及ぼす影響についての一考察, 東京学芸大学海外帰国子女教育センター紀要, 7, 1-18
- 延島明恵 1994 日系ブラジル人の自己定義の類型化—日本で働く日系ブラジル人に関する社会心理学的考察, 慶応大学社会学研究科紀要, 39, 29-35
- Oberg, K. 1960 Culture shock -Adjustment to new cultural environment, *Practical Anthoropology*, 7, 177-182.
- 小沢理恵子 1995 帰国子女のアイデンティティ, 佐藤(編) 転換期に立つ帰国子女教育, 87-119 多賀出版
- 小島勝 1988 アイデンティティの変化の型とその形成要因 小林 哲也代表 科学研究費報告書, 帰国子女の適応に関する追跡研究 京都大学教育学部, 115-119
- 小野田エリ子 1988 異文化体験の長期的意義-体験者の視点から, 小林哲也代表 科学研究費報告書, 帰国子女の適応に関する追跡研究, 京都大学教育学部
- 大西晶子 2001 「外国人労働者」のストレス対処と相互援助組織の役割, コミュニティ心理学研究, 4, 2, 107-118.
- Phinney, J.S. 1992 The Multigroup Ethnic Identity Measures- A New Scale for Use with Diverse Groups, *Journal of Adolescent Research*, 7, 2, 156-176.
- Phinney, J.S. , Cantu, C. L. & Kutz, D.A. 1997 Ethnic and American Identity as Predictors of Self-Esteem Among African American, Latino, And White Adolescents. *Journal of youth and Adolescence*. 26, 2
- Phinney, J.S. 1989 Stages of ethnic identity in minority group adolescents. *Journal of Early Adolescents*, 9, 34-49.
- Phinney, J.S. 1990 Ethnic Identity in Adolescents and Adults: Review of Research, *Psychological Bulletin*, 108, 3, 499-514.
- Piontkowski, U., Florack, A. , Hoelker, P. , & Obdrzalek, P. 2000 Predicting acculturation attitudes of dominant and non-dominant groups, *International Journal of Intercultural Relations*, 24, 1-26
- Redfield, R. , Linton, & Herskovits, M. J. 1936 Memorandum for the Study of Acculturation. *American Anthropologist*, 38, 1, 149-152.
- Redmond, M.V. 2000 Cultural distance as a mediating factor between stress and intercultural communication competence, *International Journal of Intercultural Relations*, 24, 151-159
- 斎藤耕二 1986 異文化体験と人間形成, 教育と医学, 34, 10, 22-28
- 斎藤耕二 1988 帰国子女の適応と教育: 異文化間心理学からのアプローチ, 社会心理学研究, 3, 2, 12-19.
- Searle, W., & Ward, C. 1990 The production of Psychological and Sociocultural Adjustment During Cross cultural transitions. , *International Journal of Intercultural Relations*, 14, 449-464.
- 施 利平 2000 国際結婚夫婦におけるコミュニケーションと結婚満足度, ソシオロジ, 44, 3, 57-74
- Sibuya, Y. 2000 Examination of the Contact Hypothesis: International Attitude among Japanese Company -Wives in England. *社会心理学研究*, 15, 3, 200-211.
- Siegel, B. J., Leonard ,B., Evon, Z. V., & James, B. W. 1954 Acculturation: An Exploratory Formulation. *American Anthropologist*, 56, 973-1000.
- 周 玉慧 1994 在日中国系留学生に対するソーシャルサポートの次元—必要とするサポート, 知覚されたサポート, 実行されたサポートの間の関係, 社会心理学研究, 9, 2, 105-113
- 周 玉慧 1995a ソーシャルサポートの効果に関する拡張マッチング仮説による検討—在日中国系留学生を対象として, 社会心理学研究, 10, 3, 196-207
- 周 玉慧 1995b 受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討—在日中国系留学生を対象として, 心理学研究, 66, 1, 33-40
- 鈴木一代・藤原喜悦 1992 国際家族の異文化適応・文化的アイデンティティに関する研究についての一考察, 東和大学紀要, 18, 99-112.
- 鈴木一代・藤原喜悦 1993 国際児の文化的アイデンティティ形成についての事例的研究, 東和大学紀要, 19, 123-136.
- 杉山章子・岩波明・荻野忠・江畑敬介・金子嗣郎 1992 精神科救急における外国人患者—処遇上の問題—臨床精神医学, 21, 10, 1641-1648
- Tajfel, H. 1978 *The social psychology of minorities*. New York: Minority Rights Group.
- Tajfel, H., & Turner, J. 1979 An integrative theory of intergroup conflict. In W. Austin & S. Wochel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (pp.33-47). Monteeey, CA: Brooks/Cole.
- 塘利枝子 1999 子どもの異文化受容—異文化共生を育むための態度形成 ナカニシヤ出版
- Tsuda, T. 1999 Transnational Migration and the Nationalization of Ethnic Identity among Japanese Brazilian Return Migrants, *Ethos*, 27, 2, 145-179.
- 辻本昌弘 1998 文化間移動によるエスニック・アイデンティティの変容過程: 南米日系移住地から日本への移民労働者の事例研究, 社会心理学研究, 14, 1, 1-11
- 田中共子 1991 在日留学生の文化的適応とソーシャル・スキル, 異文化間教育, 5, 98-110.
- 田中共子・藤原武弘 1992 在日留学生の対人行動上の困難-異文化適応を促進するための日本のソーシャルスキルの検討, 社会心理学研究, 7, 2, 92-101
- 田中共子・高井次郎・神山貴弥・藤原武弘 1993 在日留学生の必要なソーシャル・スキル, 情報行動科学研究(広島大学総合科学部紀要III) 17, 87-99.
- 高井次郎 1989 在日外国人留学生の適応研究の総括, 名古屋大学教育学部紀要, 36, 189-147
- 高井次郎 1994 日本人との交流と在日留学生の異文化適応, 異文化間教育 8, 106-116
- 竹下修子 2000 外国人ムスリムと日本人女性の結婚—結婚満足度

の規定要因の分析から, ソシオロジ, 45,2,55-68

Ward, C. & Kennedy, A. 1993 Where's the Culture in Cross-cultural Transition-Comparative Studies of Sojourner Adjustment, *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 23,2,221-249

渡辺文夫 1995 異文化接触の心理学, 川島書店

山崎端紀 1993 アジア系留学生の滞日態度の形成要因に関する研究, *心理学研究*, 64,3,215-223

山崎端紀・倉元直樹・中村俊哉・横山剛 2000 アジア出身日本語学校生の対日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割 *教育心理学研究*, 48,305-314

山崎端紀・平直樹・中村俊哉・横山剛 1997 アジア系留学生の滞日態度及び対異文化態度形成におけるエスニシティの役割, *教育心理学研究*, 45,2,119-128